書き抜き読書ノート 645	2010 年 7 月 5 日

梅棹忠夫著「知的生産の技術」岩波新書、岩波書店 1969 年 7 月 21 日刊を読む

本というものは、はじめからおわりまで読む

１．まず、本というものは、はじめからおわりまでよむものである。さきの『私の読書法』のなかでも、何人もの人がこのことをのべている。渡辺照宏氏の文章のなかで、「扉から奥づけまでせんぶよむ」という文句をみつけて、おもわずふきだしたが、それほどまででなくても、とにかくよみだしたら最後までよむというのは、うまい読書法の一つだとおもう。

２．それはなぜかというと、それが、筆者のかんがえを正確に理解するための基本的条件の一つだからである。どんな本でも、著者には全体として一つの構想というものがあって、それによって一冊の本をまとめているのである。各部分は、全体の文脈のなかでそれぞれしかるべき位置におかれることによって、意味をもっているのである。その構想、その文脈は、全部をよむことによって、はじめて理解できるたちのものである。

３．著者というものは、本をかくときには、当然のことながら、わかりやすくかかねばならない。つまり、読者の身になってかくのである。同時に、読者というものは、本をよむにあたっては、著者が何をいおうとしているのかを理解しようとつとめなければならない。つまり、著者の身になってよむのである。その第一歩が、「はじめからおわりまでよむ」というよみかたであると、わたしはかんがえる。

４．娯楽としての読書なら別だが、一般には著者の思想を正確に理解するというのは、読書の最大目的の一つであろう。内容の理解がどうでもいいのなら、なにも時間をかけて読書などする必要はない。内容の正確な理解のためには、とにかく全部よむことが必要である。半分よんだだけとか、ひろいよみとかは、本のよみかたとしては、ひじょうにへたなよみかたである。時間はけっこうかかりながら、目的はほとんど達しない。いわゆる「ななめよみ」で十分理解したという人もあるが、あまり信用しないほうがいい。すくなくとも、きわめて危険で非能率的なよみかたであろう。

５．実際問題としては、ついよみはじめてみたものの、おわりまでよむにたえない、くだらない本だということを発見することもあり、あるいは自分にはむつかしすぎて歯がたたぬのに気がつくこともある。そういうときには、途中でなげだしてしまうのも、やむをえない。そういう場合をもかんがえて、読書の技術としてわたしが実行しているのは、つぎのような方法である。まず、はじめからおわりまでよんだ本についてだけ、わたしは「よんだ」という語をつかうことを自分にゆるすのである。一部分だけよんだ場合には、「よんだ」とはいわない。そういうときには、わたしはその本を「みた」ということにしている。そして、あたりまえのことだが、「みた」だけの本について

は、批評をつつしむ。

6．しかし、世の中には「みた」だけで本がかたられることがすくなくないようである。本をかいたことのある人ならおそらく経験があるだろうが、新聞や雑誌にでる批判・引用・紹介のなかには、とうてい全部をよんだうえでなされたとは信じがたいものがでてくるのである。なかには、その本でのべられていることの正反対が「紹介」されたり「引用」されたりする。ちゃんとした知的職業についていても、読書のもっとも基礎的な訓練ができていない人があるということなのだろう。

P100 ～ 103

[コメント]

読書は思慮深さを身につける上で欠かすことができない。では、本はどのように読んだらよいか。はじめからおわりまで読むのが基本中の基本。その理由もわかりやすく書かれているのが、名著「知的生産の技術」。この本こそはじめからおわりまで何度読んでも新しい発見がある。

－ 2010 年 7 月 5 日　林明夫記－